

## 日本の教育心理学パラダイムの成立にかかわる問題

足立 自朗  
(埼玉大学)

## 1. 問題

明治期以降(教育)心理学は、教育学とともに、教員養成の基本教科として位置づけられてきた。しかし、何を教えれば教育心理学を教えたことになるのか、教育心理学教科書の内容はどのような構成要素によって組み立てられるべきか、長いこと明瞭でなかった。

この報告で採り上げるのは教育心理学のパラダイムの成立過程をめぐる問題であるが、それは教育のパラダイムであり、研究プログラムに連なるような(研究の)パラダイムではない(→教育心理学の教育パラダイム)。もとより、ある学問分野における研究動向と教科書との間には、相互に関連があることを認めざるを得ないが、Thomas Kuhn の言うような両者の密接な関係は教育心理学分野にあっては見られない。

教育心理学の教育パラダイムは、「四本柱の教育心理学」とわれわれが呼んでいるものであり、「教育心理学教科書は、発達・学習・人格または適応・評価の4つの領域によって構成されなければならない」、「発達・学習・人格または適応・評価の4領域について語るならば、教育心理学を講義したことになる」とする信念である。このパラダイムは、第二次大戦直後の「連合軍」占領下の時代にいわば突如として形成され、以後、40年にわたって戦後教育心理学の教育内容の枠組みを支配してきたものである。このような観点に立つと、明治期から大正を経て第二次大戦の時期までをプレパラダイム期と呼び第二次大戦後から現在までをポストパラダイム期と呼ぶことができる。では、教育心理学パラダイムたる「四本柱の教育心理学」はどのような経過で形成され定着したのか、そして、突如として成立した教育心理学パラダイムがかくも長期にわたって支配的であり続けたのは何故か。本報告では、これらの問題について、多くの推測を織り込んでひとつのシナリオを構成してみたい。

## 2. 四本柱の教育心理学の成立過程

## 2.1. 教育指導者講習会 (IFEL)

1948~1952年 年2回8期 参加者総数 9,374名  
米国教育使節団(報告一次1946、二次50)  
→日本の教育の民主化

GHQ の民間情報教育局 (CI and E)

## 2.2. 米国からの参加講師(教育心理学系)

I & II 期 48~49 教授グループ(東学大)

Daly, Francis

Director of Adjustment Services, Boston

Jersild, Arthur

Prof. of Education, Columbia Univ.

V & VI 期 50~51

教育心理学(東大)教育評価(東教大)

Crow, Lester D.

Deputy Chairman, Brooklyn College,

Smith, Denzel D.

Prof. of Psychology, Univ. of Maryland

## 2.3. 想定される講義内容

Jersild :

子どもの自然的発達と教科の学習?

→依田新、波多野完治など教科のグループに影響。

cf. 依田新編 1950「教育心理学」金子書房

Crow :

Blair の論文紹介、教育心理学の4領域に触れた。

→岡部弥太郎、田中正吾たちに影響。

cf. 岡部弥太郎編 1956「教育心理学」東洋書館

Blair, G. M. 1949 The content of educational psychology. J Educ. Psychol, 40-5, 267-274

## 2.4. 仮説的ストーリー

・日本における4本柱の教育心理学は、米国研究者の影響の下で、1950-51年の教育指導者講習会において誕生した。

・Jersild の講義を受けたグループの著作は、結果として4領域をふくんでいるが、意図的なものではない。このグループの教科書は、その後の教育心理学教科書の編集にあまり影響を及ぼさなかった。

・これにたいし、Crow のグループは、彼から大きな影響を受けとり、講習受講者の共同作業として Blair の構想に忠実な著作を刊行した。これが、その後の日本における4本柱の教育心理学の普及に多大な影響を与えた。

・Blair の論文は、当時の米国の代表的とみなされる教育心理学教科書5冊の内容分析を試みたもので、目次項目を分類しそれぞれのページ数を数えた、きわめてシンプルな研究であった。にもかかわらず、(または、それゆえに)日本においてはこれが絶大な影響力をもった。

## 2.5. 新たな疑問

4本柱の教育心理学の成立は、日本の側にそれを受け入れる素地があったとはいえ、極めて外発的な過程として生じたと言つてよい。ではなぜ、この教育心理学パラダイムが抵抗なくすんなり受け入れられたのか。「教育心理学の領域は、一般に発達・学習・適応・評価の四つに分けられることが多い」(育柳他 1985)と書かれる状態は、今でも基本的に変わらない。このパラダイムに疑問や批判が投げかけられなかった訳では決していないが、1956年以降、40年もの間、教科書を支配し続けることができたのは、いったい何故だろうか。

## 3. 受容と存続の問題

何故すんなり受け入れられたか：外的条件を言えば、パラダイムが単純で、再現しやすかったからである。何故続いているのか：直接的な答は簡単で、既存のパラダイムを変える必要がなかったからである。

教育心理学者(集団)の内的問題の解決のために求めたものではなく、たまたま外から転がり込んだ偶然的な条件を取り入れたのである。

具体的な研究テーマについて：

・パラダイム形成と存続の跡づけ

・研究と教育との乖離 or 研究と教科書執筆との乖離

4領域は「イレモノ」である。その中身は、たしかに、そのときどきの研究水準をある程度反映して「入れ替え」られる。だが、イレモノ相互の関係やイレモノの不足については、まともに問われることはない。

・教職科目としての「教育心理学」と、研究領域としての教育心理学

・研究者養成の教科書と教員養成の教科書